

リレー随筆

鹿児島島の風景と機材紹介

鹿児島大学病院 白尾 貞樹

自分の趣味は写真撮影だ。特に風景写真が趣味で、まだ見ぬ風景を見るために時間を見つけては出かけている。市内のような近場で済ませるときもあるし、県外まで遠出するときもある。今回はせっかくの鹿児島市医師会報であるので、今までに撮影した鹿児島の風景を、写真を交えて紹介してみたい。その後、興味のある方の為に現在自分が使っている機材を紹介していきたい。

【狐が丘】

大河ドラマ「西郷どん」のオープニングで一躍有名になった狐が丘。元々写真好きには知られた場所であった。黄金色のススキに憧れて、登山好きの学友と共に車で出発した。桜島経由で大隅に渡り、狐が丘と書かれた木製の看板に従い山に向かった。山道は舗装されておらず、道に転がっている落石を取り除きながら登って行った。山道を抜けると急にアスファルトで舗装された広い道路に出た。広い道路の先は鎖で塞がれていた。恐らく牧場か風力発電所に繋がっているのだろう。狐

が丘への入り口を見失った我々は車を降りてうろうろし始めた。入り口は道路の脇にあった。雑草が生い茂っていて本当に入り口かわからない程であった。我々はやや逡巡したが、折角ここまで来たのだからと登り始めた。完全な獣道で、背の高い草を掻き分けながら登って行った。友人が登山部出身であったので非常に助かった。登っていくと視界が開け、一面がススキ野原となった。小高い丘が終点となっていて、そこにベンチがポツンと置いてあった。近くには風力発電所が並んでおり、その右手に桜島と錦江湾を一望できた。中々良い眺めで、別の世界のどこかに居ようであった。写真は空と野原の輝度差が激しく良いものが撮れなかったが、大満足であった。しかし、下山したときに友人の足に大きなダニがついていた。幸い刺されてはいなかったが、狐が丘に向かう際は必ず長袖長ズボンで赴いた方が良さだろう。

狐が丘から帰宅時に、彼岸花を育てている人に会った。家に招かれ彼岸花を見せていただいた。もし狐が丘に行くことがあれば、道中彼岸花も探してみてほしい。

【魚野フライトエリア】

写真好きにとって雲海は憧れだ。新しいカメラを買ったある日の当直中、どうしても雲海が撮りたくなった。鹿児島で雲海といえば魚野フライトエリアである。次の休日の午前3時に出発した。雲海は、日中暖められた空気が夜間の放射冷却で水蒸気となることで発生する。その日は日中暖かく、夜になるとグッと冷え込んだ。雲海が発生するには好条件の日であった。といっても、実際に雲海が出て



狐が丘

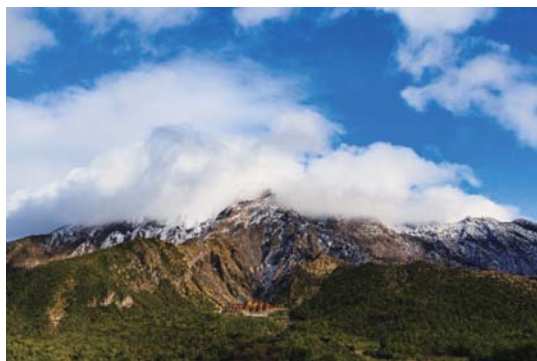


魚野フライトエリア

いるのかは行くまでわからない。ドキドキしながら車を進めていくと、栗野IC前のトンネルあたりから一気に霧が出てきた！これが雲海である。そのまま高速道路を降り、霧の中を魚野フライトエリアへ進んだ。山を登り魚野フライトエリアへ到着すると、既に他の写真愛好家の車が停まっていた。お仲間である。到着時間は午前4時過ぎであった。まだ日は昇っておらず、眼下に霞がかかった街明かりが見えた。自分が通ってきた道も雲海の一部であったのだ。星空も綺麗であった。しばらく待っていると、日が昇ってきた。雲海と街がオレンジ色に照らされていく。絶景であった。

【桜島冠雪】

大学6年生の冬であった。国試勉強に飽きてきていた訳ではないが、暇を見つけては写真を撮りに行っていた時期であった。その年は暖かく、まだ鹿児島に雪は降っていなかつ

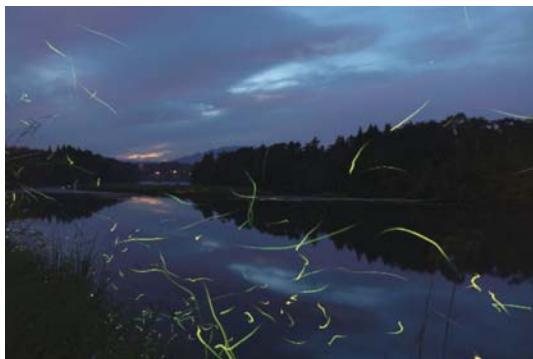


桜島冠雪

た。そんな暖かい冬の朝、起きてみると桜島に雪が積もっていた。行き先を自習室から変更し、桜島へ向かった。ところどころ雪が残っている道を進み湯ノ平展望台に辿り着いた。雪を踏みしめながら誰もいない階段を登るとアルプス山脈のような桜島が見えた。普段見る桜島とは全く違う景色で新鮮であった。望遠レンズで狙うと、雪で覆われた硬い岩肌が見えた。雄大に見えるが、もし山頂まで登るとすると非常に険しい山になるのだらうと思った。

【さつま町時吉のホタル】

5月といえばホタルの季節である。鹿児島はホタルが有名で、ホタル舟もいくつかあり、そこからの眺めは絶景である。しかし、ホタルは三脚を用いて撮らないといけないため、ホタル舟からの撮影は難しい。さつま町時吉の川辺は、ホタルを観察するのに良いスポットである。地元の人しか訪れないため、かなり空いている。日が沈むころになるとホタルが飛び出し、大体20時くらいまでは明かりを楽しむことができる。おすすめスポットである。



さつま町時吉のホタル

【柊野の彼岸花】

さつま町柊野地区ではあぜ道に大量に彼岸花が植えられている。その数はなんと20万本である。9月下旬から10月初めごろに見ごろとなり、柊野地区は稲穂と彼岸花で別世界のような景色になる。近くには学校もあり、校舎を背景にすると更に風情が出る。ちょうど



柊野の彼岸花

彼岸花の季節が終わってしまっていて心苦しいが、来年まで覚えていたら是非訪れてみて欲しい。

ちなみに彼岸花スポットとしては市内では児玉美術館が有名である。夕暮れと一緒に撮りたいが閉館時間が早く中々実現できていない。

しのめ

【東雲の里】

県内にも、所謂木を植える人はいる。一人で何年もかけて花々を植えている方々だ。内之浦のイワツツジや、垂水の千本イチョウも有名だが、一番心を打ったのは東雲の里だ。東雲の里は紫陽花と紅葉で有名なところだ。管理人とお話ししたことがあるが、病気にも負けずに紫陽花を植え続けていた。特に、東雲の里の最奥部である東雲の滝の近くの紫陽花は絶景で、あり得ない程の密度で紫陽花が植えられている。東雲の里に行く人は多いが、最奥部まで足を進める人は少ない。もし行く



東雲の里

ことがあれば是非奥まで行ってほしい。

【現在使っているカメラ】

様々なカメラを使ってきたが、現在メインで使っているのは、CanonのEOS Rである。所謂フルサイズミラーレスカメラである。現在カメラ業界は光学ファインダーを搭載している一眼レフから、ファインダーもデジタルになっているミラーレス一眼へ軸足を移しつつある状態で、EOS Rもその一つである。画質の良いフルサイズセンサーを搭載している。また、AFユニットが撮像面と同じ場所にあるため、AFユニットが撮像面とは別に搭載されている一眼レフよりもピント精度が良い。一眼レフ時代はピンズれによるAF微調整に悩まされていたが、今はAF微調整の必要もなく非常に快適に撮影できる。最近のファームアップ (Ver1.4) で瞳AFの処理速度や、被写体追従時の挙動が改善されたためより使いやすくなっている。非常に扱いやすい相棒である。

現在、主に使用しているレンズは、Canon製のRF 35mm F1.8 MACRO IS STM, RF 15-35mm F2.8L IS USMと、MS OpticsのFluorit Super Apochromat Aporis 135mm F2.4の3つである。それぞれについて紹介していく。

RF35mm F1.8 MACRO IS STMは、現在のRFマウントで最もコストパフォーマンスに優れたレンズである。レンズ構成図をみると、一眼レフ時代に発売されたEF35mm F2 IS USMをひっくり返したような設計になっており、後玉が非常に大きい。ミラーレス専用設計であるRFマウントでは、マウント面からセンサーまでの距離であるフランジバックを短くとることが出来、設計の自由度が上がるためにこのようなレンズが実現できた。軽く画質の良いレンズで、手振れ補正であるIS (Image Stabilizer) も搭載している。ハーフマクロでもあるため、近くに寄ることもでき常用レンズとして最適である。何もない時や街角をブラブラする時はこのレンズを使用してい

る。鏡筒に溝が彫られており、アダプターを使わなくても純正のマクロリングライトが使用できるのも利点である。

RF 15-35mm F2.8L IS USMは最近導入した広角ズームレンズである。元々風景を撮影することが多いため広角ズームは多用しており、このレンズを導入する前はEF 16-35mm F4L IS USMをアダプターを介して使用していた。F4 F2.8と明るさが明るくなり、周辺画質も雲泥の差で良くなっている。全紙で印刷してキタムラに飾ったり、写真展に出したりと経験値が上がったために引き伸ばし時の画質が気になり、リブレースした格好である。前述したように明るいために星景写真用レンズとしても期待できる。5段分の手振れ補正もついているために動画撮影時にも活躍するだろう。その分デメリットもあり、画質が向上した分重量が増加してしまっている。実は、RFのLレンズ（Canonの高性能レンズシリーズはLレンズと呼ばれ、型番にLがつく）は重い傾向が強く、軽量のレンズでの機動力を重視している自分としては悩みの種になっている。重量級のレンズに慣れる為に最近では休日の度にこのレンズばかり持ち出して体を慣らすようにしている。しかし、最近中々良い絵が撮れない。散漫な絵ばかり撮れるようになってしまって、むしろEF 16-35mm F4L IS USMの時の方が良いものが撮れてしまっている。金銭的に無理をして導入したので落ち込んでいたのだが、先日コムロミホ先生とお会いする機会がありこの悩みが解消された。コムロミホ先生はパナソニックのミラーレスや今度発売されるNikonのZ50等のカタログ写真を撮影されている有名プロカメラマンである。夫婦で写真家をしており、「写真家夫婦上田家」というYouTube Channelも運営されている。先生に「最近広角ズーム縛りをしているのだが、散漫な写真ばかり撮れるようになってしまってスランプである」と相談したところ、先生は1. 画面のどこかに人物を入れる。2. 前景を入れる。3. 前景が無いときは意図

的にローアングルを用いて前景をつくる。に気を付けて画面が散漫にならないようにしているとのことであった。納得できることばかりで、これからは上記に気を付けて撮影をしていきたい。

Fluorit Super Apochromat Aporis 135mm F2.4は、少々変わったレンズである。キヤノンマウントではなく、ライカMマウントを採用したレンズである。製作元であるMS Opticsはほぼ個人で営業されている日本の光学メーカーで、レンズ改造やライカマウントのオリジナルレンズを販売している。このAporis 135mmを焦点工房のマウントアダプターを介してEOS Rに接続し使用している。135mmは人物にも良いし、風景を切り取るのにも向いている。どちらも三脚に据えるような撮影ではないため、持ち歩きやすく軽量のこのレンズを使用している。開放では柔らかく、絞ると非常にシャープに映る。コマ収差も調整できるため、ボケの大きさも変えることが出来る。このレンズを導入してから、他の望遠レンズは全く使わなくなってしまった。ちなみに、自分が所有しているレンズは実は型番0の試作品である。

鹿児島島の風景と機材について紹介してきたが、如何であったろうか。もしこれらの写真がきっかけで上記の場所にいくことがあれば幸いである。かなり昔の写真もあるので、今の機材で撮っていないものもあることは留意いただきたい。機材紹介については非常に僅かな人にしか参考にならないと思うが自分にはこれ位しか書くことのできる内容がなかった。申し訳ない。しかし、Aporis 135mmやRF15-35mmについては現在インターネット上でも情報が乏しいため、どこかで役に立つことがあるかもしれない。

次号は、鹿児島大学病院 村山剛大先生のご執筆です。
(編集委員会)